99/9/28

＊キリスト教学特殊講義１＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　　S. Ashina

第1講：聖書－キリスト教思想の源流－

第２講：古代－キリスト教教理の形成過程－

1. 国教化　　2. 正統と異端　　3. 三位一体論　　4. キリスト論

３：三位一体論・キリスト論

３－１：正統教義の成立状況

1.歴史的コンテクスト：国教化→政治宗教・政治神学

正統教会－正統教義－正典化

2.教会会議における決定と争点

ニカイヤ公会議(325)　：父と子のホモウーシオス（同本質）

カルケドン公会議(451)：キリストの本性を巡って（両性論か単性論か）

3.異端

アレイオス派、ネストリウス派

cf.キュリロス、アポリナイオス

３－２：正統教義としての三位一体論

4.ドグマとは

(1)防御的意図：何であるかよりも、何でないか

(2)実践的意義：救いの確実性をめぐって（キリスト論における救済論的意味）

5. 三位一体論の前提（ティリッヒ）

1.宗教史－類型論

2.神的生命（生きた神）の経験

3.キリスト論

6.内在的三位一体と経綸的三位一体

３－３：キリスト論とその現代的意義

7. 両性論と実体形而上学のアポリア

プロセス神学の場合（ハーツホーン）

8. 多様なイエス像（ペリカン）

ラビ、歴史の転換点、異邦人の光、王の王、宇宙的キリスト、人の子、真の像、十字架につかられたキリスト、世を統べる修道士、たましいの花婿、神人のモデル、普遍人、永遠を映す鏡、平和の君、良識の教師、霊の詩人、解放者、世界に属する人

9. 形而上学的枠組みを超えて→神と人間の本来的関係性の歴史的現実化

ティリッヒの提案

＜文献＞

1.ティリッヒ　『キリスト教思想史I』（ティリッヒ著作集・別巻２　白水社）

『組織神学・第二巻』（新教出版社）

2.バイシュラーク『キリスト教教義史概説　上下』（教文館）

3.マルー　『キリスト教史２・教父時代』（講談社）

4.ペリカン　『イエス像の二千年』（講談社学術文庫）

三位一体論→広義のキリスト論

救済論的

キリストによる救いの十全さ＋聖霊の執り成しの経験

三神論にならないために

西：substantia ----- persona

東：ousia -----hypostasis

325～451：アリウス→ネストリウス

アタナシウス(～373)

① 救済論的意図

② 論理的整合性

という二つの要求

養子説：イエスは単なる人間であったが、神の子として受け入れられた。

子の神性と父の神性には差がある（従属説）

アリウス：子は時間の内で創造された有限的な被造物

まだ子の造られなかった時があった

子の神性の不完全、人間の救済が危うくなる

アタナシウス：父と子の同本質(homoousia)

仮現説：イエスが人間と同じ本質を持つことを否認して、十字架の苦難は仮にそう見えただけのことであるとする

様態説：3世紀の半ばのサベリウス、サモサタの司教パウロ

神の単一性を強調、父と子と聖霊の連続性を強調

同じ神の三つの様態

キリスト両性論：父と子と聖霊との同本質性

→ 第二のpersonaであるキリストの内部における神性と人性の関係について、解釈の幅がある

① キリストの人性を強調（養子説のライン）

シリアのアンティオキア、ネストリウス

マリアはキリストの母であるが、神の母(Theotokos)ではない

② キリストの内で神性と人性とは混合し、人性が神性に吸収

（単性論：様態説のライン）

→ キリストの人性は人間に関わりを持たないことになる

カルケドン信条：

二つの性について

まざることなく、かけることなく、

分けられることもできず、離すこともできない

パネンベルク 『キリスト論要綱』（新教出版社）